

令和5年度プロジェクト発表会・意見発表講評

全体審査委員長 安藤 義道

総括

この数年はコロナウィルス感染の問題もあり、プロジェクト発表会・意見発表会もオンラインで実施、オリンピック記念青少年総合センターの大規模修繕工事の関係上、都内北区滝野川会館で実施を行ってきたこともある。ただ、これらの開催は発表のみで、会の目的のひとつでもある全国の農大生が交流するという場も機会もなかった。プロジェクト発表会・意見発表会にとって試練の時でした。

その意味で、今回のオリンピック記念青少年総合センターでの開催はとてもよかった。日程的に地方大会と近くて、関係する農大校には準備が大変な事情もあったようだが、ビンゴゲームに沸き、母校を誇らしげに紹介する交流会の様子を見ていると、プロジェクト発表会・意見発表会にも日常が戻ったと感激した。最近は何となく名刺も用意してきていて、それを交換しながら談笑する風景も見られて、さながらビジネス交渉の場の雰囲気すら感じた。

発表はどれもすばらしく、さすが予選を通過して選ばれてきただけあって、審査に当たった委員の先生方も、順位付けをするのがつらかったというのが正直な感想であった。特にすばらしいと強調されておったのは、「経験した現場から導き出した研究に基づく発表」ということ、「真剣なまなざしと発表姿勢」ということでした。今後の研究発表でも生かして続けていきたいコメントです。

1.プロジェクト発表 養成課程の部

今年の発表も昨年同様に男女半々であったが、課題はかなり今年の特徴が出ていた。特に目についたのは、昨年多かったスマート農業に関する研究がほとんどなかったことと、代わりに食料や飼料の「自給率向上」や加工・販売・付加価値といった「六次産業化」に関する研究が多かったことだった。

大まかに作目別で見ると、果菜が4課題（トマト、キュウリ、イチゴ2）、果樹5課題（キウイ、カキ、ブドウ2、スタチ）、野菜2課題（伝統野菜、レタス）、作物2課題（自給飼料、飼料作物の食用化）、畜産（和牛の受精卵移植）と経営（SNS活用による起業）が各1課題だった。しかし、イチゴのひとつは冷凍イチゴに関するもの、ブドウはシャインマスカットの長期保存とジュースの加工、野菜は農家レストラン用の伝統野菜とレタス

の粉末化でレタスパンの製造、作物は飼料作物ソルガムの食用化と放牧による自給飼料の活用というように、単に生産技術に関わるだけでなく、農作物の加工や付加価値、規格外野菜や牧草の有効利用といった SDG s（持続可能な開発目標）につながる視点からの研究だった。

今回の課題では、従来多かった花や稲、機械や施設、作物保護や土壌肥料に関するものがなく、どちらかというとなら生産技術改善に関わるものだけというより、農作物に加工等により付加価値をつけることで農業経営への改善を図ろうとする研究の傾向がみられた。ウクライナ戦争を契機とする食料・飼料供給の不安が自給への関心を生み、コロナウィルスによる経済の停滞が六次産業化への関心を生んできているともいえよう。

2. プロジェクト発表 研究課程の部

発表は今年も4課題と少し寂しかったが、発表内容は充実していた。大きな特徴として養成課程の成果を受け、まとめ上げた発表が多かったこと、どの発表も、技術をしっかり理解した上で調査・研究に取り組んだことが見てとれる発表だった、との評価であった。

発表は2課題が「自家の経営改善」を意識した取り組みとしてまとめられており、残りは「環境」「農業福祉」といった今後も重要となってくる分野への取り組みで、他県にも参考となるものだったが、現場で実際に使える技術であるのかは今後の検証が必要である。

問題もある。プレゼンテーション資料のまとめ方として、安易にフリー素材のイラストを多用することでデータを見えづらくしていた。フォントサイズが小さくて、せっかくのデータが分かりづらいので避けた方が望ましい。

プロジェクト発表は、審査項目にもあるように、「現場で使える技術として創意工夫がなされている」こと、また、成果として「自家の経営、地域の農業発展につながるものである」ことが、高い評価にはもつながるとのことだろう。

3. 意見発表の部

発表者は少し女性の数が上回ったが、審査項目にあるように「農業・農村を担う農大生としての夢や希望」にあふれた内容で、「自信のある態度で発表」ができていた。

発表で共通していたのは「農業への夢を目指して農大に入学した」ということ、そして「農大に入って考え方が変わった」という主張である。審査項目には「意見・提言の内容」という項目があるが、主張には大きく分けて「提案型」と「将来の夢型」があった。

「提案型」というのは「担い手の育成」に関するもので、中身としては制度的なもの、

経営改革的なもの、土地の有効活用に関するもの、の提案というように一人一人の主張がしっかりと盛り込まれていた。

「将来の夢型」というのは自らの「就農」に関わるもので、中身としては、経営的にはやりたい作目であったり、加工であったり、また、地域の守り手であったり、とやはり一人一人の主張がよく盛り込まれていた。

発表数としては前者が3課題、後者が7課題と「将来の夢型」の方が多い印象をもった。

今回の発表で異色だったのは、留学生の発表があったことである。留学生として農大に学び、卒業後は母国に帰って「農業機械や資材のバンク化」「農地のバンク化」「人材のバンク化」という「三つのバンク化」の実現という、農業ビジネスを目指す発表があった。

全体的に共通していたことは、こうした「提案」や「夢」が「農大の入学で生まれた」という点であった。農大教育のすばらしい一面を見た。

おわりに

発表会の前日には、東京では珍しい大雪注意報があり、一部交通機関が乱れるというアクシデントもあった。

また、新年早々の能登半島地震では、未だ各地に多くの爪痕が残り、一部ではイベントの中止や自粛も行われている。

そんな中、4年ぶりにここ国立オリンピック記念青少年総合センターで通常の全国農業大学校等プロジェクト発表会・意見発表会が開催できたことに感謝するとともに、実施を推進してこられた企画委員の学生や職員のみなさん、また、運営に当たられた学生や職員のみなさんに改めて感謝申し上げます。